

東アジア諸語における 〈数〉に関する発想と表現

——名詞の単数と複数をめぐって——

禹 昊 穎

[キーワード：数、単数／複数、可算性、通数、配分複数／集合複数]

0. はじめに

印欧語や英語における〈数〉(number)という概念は極めて重要な文法項目の一つである。これらの言語の名詞・代名詞・動詞などには、〈数〉という文法的なカテゴリーが存在し、それを曖昧にしておくことは制限上許されないとされている。例えば、英語では、可算化を言語化する文法的な手段が言語に深く組み込まれており、原則として、単数形か複数形かのいずれかを常に明示的に表示しなければならない、「机の上に本がある」を英語に訳すと、指示対象の「数的異なり」¹によって、

- (1) a. There is a book on the desk.
 b. There are books on the desk.
 └──────────┘
 数の一致

のようになり、名詞の数に呼応し be 動詞に変化が現れる、いわゆる〈数の一致〉(number agreement)と呼ばれる現象が生ずる。このような単数・複数の区別について、金田一(1988: 68)には、次のような記述が見られる(傍点・下線は引用者)。

この単複の区別は、世界の言語にかなり普遍的な現象で、インド・ヨーロッパ語はすべてもち、ウラル諸語・アルタイ諸語からビルマ語にまで及んでおり、ハム・セム諸語、アフリカの諸言語や太平洋の諸言語にも見られる。すなわち、数の区別のない言語の方が珍しく、日本語のほかは朝鮮語・旧満州語・中国語・タイ語・ヴェトナム語から、インドネシア語などがそうで、大体、アジアの東南方にかたまっている。

上記の記述からも分かるように、東アジア諸言語の名詞は、それが指し示す〈指示対象〉(referent)²の数的異なりの表し分けから開放されており、英語の場合と違い、コ

(2)

ンテキストに任せて暗示的に行なわれるため、数の支配を受けないといえよう³。即ち、英語の「two girls/two books」のような表現は許されず、また、「man-men」のような、名詞が指し示す指示対象の数的異なりによって、自らの形態を変えることはないということである。但し、それは東アジア諸言語の名詞に数的異なりを表す形態が全く存在しないということの意味しているのではなく、さらに、意味的にも表し分けることが全くできないということの意味しているわけではないのである。

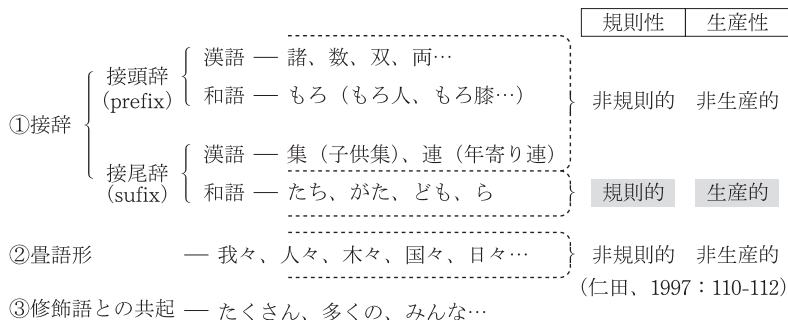
現代韓国語の場合、個別言語の領域に限らず、異言語間を横断する形での研究も少なくはなく、例えば林（2006）は、日本語と韓国語の数に関わる表現構造を比較・対照し、それぞれ「単数表現志向」と「複数表現志向」に位置づけている。本稿では、既に触れたように「数の区別のない」と言われる東アジアの言語の中でも代表して日本語・韓国語・中国語（以下、「3言語」と記す）を取り挙げ、それらの言語に見られる数的異なりの表し方に限定し、それに関わる表現構造の比較の試みとして、次の二点について論ずる。まず、3言語における名詞の数の区別に関わる人間の理解のあり方について、英語との比較を通じて触れておく。次に、それをもとに、林（2006）の「単数表現志向」と「複数表現志向」について私見を述べる。

1. 理論的な背景

具体的な分析に入る前に、本節では、その背景として、言語間における複数形の表し方や韓国語の複数形に見られる諸機能について簡単に触れる。また、人称代名詞について若干の考察を行うことにする。

1.1 複数の表し方及び考察対象

既に触れたように、3言語の名詞は指示対象の数的な在り方に無関心である。しかし、それは指示対象の複数性（plurality）を表す形態が全く存在しないわけではなく、大別して「接辞（affix）」・「畳語形（reduplicated form）」・「修飾語との共起」の三つに分け



〈図. 1〉日本語の複数の表し方

られる⁴。ここでは、先ず日本語の複数性の表し方について取り上げることにする。

以上の三分類に基づき、韓国語と中国語との複数性を表す形態を照らし合わせて考えてみると、下位分類は若干の相違が見られるものの、上位分類は概ね共通していると考えられる。

本稿では、上記の三分類のうち、和語系の接尾辞「たち」に焦点を絞って考察を進める。また、それと直接的に対応すると思われる韓国語の「*tul*⁵と中国語の「们 *men*」⁶を取り上げ（以下、これらの接尾辞を《複数形接尾辞》と記す）、名詞との関わりを通して3言語に見られる一般的な性質について論ずることにする。

〈表. 1〉 3言語の《複数形接尾辞》

	J	C	K
接尾辞	✓	✓	✓
補助詞	*	*	✓
依存名詞	*	*	✓

(J: 日本語、K: 韓国語、C: 中国語、以下省略)

韓国語の「*tul*」は「接尾辞」以外に、〈表. 1〉に示したように、現れる場所によって、さらに「助詞」と「依存名詞」とに分類されており⁷、いわゆる〈同形異機能語〉と呼び得る語であるため、様々な観点から活発に研究されている。

1.2 人称代名詞における単複

日本語の名詞における数的異なりについて、大江（1972: 749）は「単数対複数の概念（one 対 more than one）は日本人も所有しており、たまたま日本語の名詞がこの概念上の区別を形式的に表わさないだけなのだ」と述べており、玉村（1986: 5-6）は「つよく意識にのぼることがなければ、そして数の明示の必要がなければ、我々はあえてかかる形式や手段を用いることをしない」と述べている。また、金田一（1988: 68）は「日本人も、単数と複数の区別は頭にある。が、それをいちいち言葉の上に表わさないだけだ」と指摘している⁸。しかし、これらの指摘はおそらく名詞に限られる指摘であろう⁹。

〈表. 2〉 3言語の人称代名詞

		無標 (unmarked)	有標 (marked)
		単数	複数
一人称 ¹⁰	J	わたし、ぼく、おれ ¹¹	わたしたち、ぼくら、おれたち
	K	나 [<i>na</i>]、저 [<i>ce</i>]	우리 (들) [<i>wuli (tul)</i>] ¹² 、저희 (들) [<i>cehuy (tul)</i>]
	C	我 [<i>wǒ</i>]	我们 [<i>wǒmen</i>]、咱们 [<i>zánmen</i>]

(4)

二人称 ¹³	J	あなた、きみ、おまえ	あなた <u>が</u> た、きみ <u>た</u> ち、おまえ <u>ら</u>
	K	너 [ne]、당신 [tangsin]	너 <u>희</u> (들) [nehuy (<u>tu</u> l)], 당신 <u>들</u> [tangsin- <u>tu</u> l]
	C	你 (您) [ní (nín)]	你 <u>们</u> (您 <u>们</u>) [nimen (nínmen)]
非人称 ¹⁴	J	かれ、かのじよ	かれ <u>ら</u> 、かのじよ <u>ら</u>
	K	그 [ku]、그녀 [kunya]	그 <u>들</u> [ku- <u>tu</u> l]、그녀 <u>들</u> [kunya- <u>tu</u> l]
	C	他 [tā]、她 [tā]	他 <u>们</u> [tāmen]、她 <u>们</u> [tāmen]

というのは、〈表. 2〉に示したように、3言語の人称代名詞の〈無標〉(unmarked)は、Jespersenの言う〈通数〉(common number)という概念の支配から独立しており、不可避免地単数性が指定されている(〈通数〉については後述する)。また、それは複数性を表示する形式が付加された〈有標〉(marked)との形態的な対立関係を成していると考えられる。

上述したことは、〈数詞〉(numeral)との呼応の可否によって確認できる。3言語の人称代名詞はそれが指し示す指示対象が明示的である(2)のような構文の場合、「数的な一致」を行うことによって適格性のテストが可能となる。即ち、例えば、(2a)の「無標の人称代名詞と複数性が明示的な構文」、そして(2b)の「有標の人称代名詞と単数性が明示的な構文」では、適格性を失ってしまうということである。

(2) a. J それは私 {一人 / *二人} でやりました。

K 그것은 저 {혼자서 / *둘이서} 했습니다.

kukes-un ce {hɔnca-se / twul-ise} hay-ss-supnita

that-TOP PER by oneself-PART / NUM-PART do-PAS-HNR

C 那是我 {一个人 / *两个人} 做完的。

nà shì wǒ {yígèrén / liǎnggèrén} zuòwánde

that be PER NUM-CLA-person / NUM-CLA-person do-COMP-PART

b. J それは私たち {*一人 / 二人} でやりました。

K 그것은 저희 (들) {*혼자서 / 둘이서} 했습니다.

kukes-un ce-huy (tul) {*hɔncase / twulise} hay-ss-supnita

that-TOP PER-PL(PL) oneself-PART / NUM-PART do-PAS-HNR

C 那是我们 {*一个人 / 两个人} 做完的。

nà shì wǒmen {yígèrén / liǎnggèrén} zuòwánde

that be PER-PL NUM-CLA-person / NUM-CLA-person do-COMP-PART

このような人称代名詞について、松本(1993: 42)は次のように述べている(下線は引用者)。

人称代名詞では、あらゆる言語が少なくとも単数・複数の区別をもち、これはおそ

らく人類言語の絶対的普遍性の一つに数えることができるだろう。

2. 「数」の概念をめぐる諸説

数の概念に関しては、個別言語の領域での研究は非常に活発に行なわれている。また、対照言語学的な観点からの研究も少なくないが、多くの議論が〈表・1〉に示したように、「*tul*」のもつ「接尾辞」・「助詞」・「依存名詞」との比較・対照によって得られる知見について述べている。しかし、崔（1998）と林（2006）はそれとは異なる考察をしており、日本語と韓国語の数に関わる表現構造を比較対照し、それぞれ「単数表現志向」と「複数表現志向」とに位置づけている。両者の内容は大同小異であるため、ここでは代表して林（2006）の研究を概観する。

林（2006）は日本語と韓国語の「数」の相違について、例えば、（3）と（4）のような用例を取り上げ¹⁵、

- （3）「방송위원회는 최근 선거 출마자들의 방송 출연 규제를 대폭 완화하는 새 규정을 마련했다.」（中央、社説、10-22）

…choykun senke chwulmaca-*tul*-uy pangsong chwulyen kyucey-lul
 recent election candidate-PL-GEN broadcasting appear regulation-ACC
 tayphok wanhwahanun say kyuceng-ul malyenhay-ss-ta
big loosen new correction-ACC establish-PAS-DEC

放送委員会は最近、選挙出馬者のテレビへの出演規制を大幅に緩和する新しい規定を設けた。（林、2006：334）

- （4）「우리가 그동안 즐기치게 주장해온 이런 내용들은 OECD 권고안에도 고스란히 담겨 있다.」（中央、社説、10-7）

…kutongan cwulkichakey cwucanghay-o-n ilen nayyong-*tul*-un OECD
 during vigorous advocate-come-PERS such content-PL-TOP OECD
 kwenko-an-ey-to kosulanhi tam-ki-e i-ss-ta
recommendation-in-DAT-AUX just as it is put into-VOICE-CONE be-PAS-DEC

「われわれが以前から主張してきたこうした内容は、OECD勧告案にもそのまま含まれている。」（林、2006：326）

「日本語は、特に複数の明示の必要がない限り、物事を複数で捉えることは稀であり、ただ単数で表そうとする「単数表現志向」であるのに対して、韓国語の場合は、物事をできるだけ複数で以て表そうとする「複数表現志向」の傾向が極めて目立つ」（pp. 338-339）と指摘している。その根拠として「韓国語の複数接尾辞「*tul*」は、日本語の場合と違って接続する名詞に制約がなく、自由である」（p. 339）ことや「韓国語は、単数表現で一向に構わない場合にも、あえて複数で以て表現を代表させようとする、強い表現心理が働いている」（p. 339）と説明しており、日韓対照研究の幅を拡大した研究で

(6)

あり、また、極めて斬新なものであると考えられる。しかし、林(2006)の指摘には一つの疑問が残る。それは、外界に存在する事物(名詞)を無標(unmarked)と有標(marked)の対立という観点から捉えた場合、無標は常に「単数」を、有標は常に「複数」を表すのか、という点である。

対照言語学とは、当該言語と対照される言語とが存在して初めて成り立つ学問分野である。より厳密に言うならば、異言語間を横断する形で、ある言語的カテゴリーが諸言語においてはどのような言語形式で実現されるかを確認し、そのような言語事実からどういう意味合いを引き出せるかという解釈を付け加える作業までが必要となる。表層的なレベルにおいて出現する両言語の《複数形接尾辞》の数的多寡(即ち、「たち」よりも「tul」の方が多く出現する)のみを問題にするならば、両言語の「数」の概念に関わる表現構造の特徴を捉えるための十分な考察が行われたとは言い難いではなからうか。数的な多寡を越えた広義の妥当性を含んだ意味合いを与えなければならない。また、名詞の無標は「単数」であり、有標は「複数」であるという論理の領域に立てこもってしまった表面的な捉え方が問題を分かり難くし、さらに、数的な多寡に偏った視点が、完全には文法的な数の範疇と化していない諸言語における言語事象の理解を妨げているのではないか。

國廣(1992)は「翻訳という形で示される2言語の意味的に同等な表現が表そうとしているほぼ共通の意味つまり「底層意味」を出発点とし」(p. 2)、同一の「意味基盤に基づく表現は言語によっていろいろな異なりかたを示すので、この異なりかたを分析するのが対照言語学的な発想と表現の研究目標である」(p. 3)と指摘しており、表層構造における数的な多寡の優位による分析ではなく、より突き詰めた分析による考察が必要であろう。

以上、先行研究を概観し、それに潜んでいる問題について私見を述べた。以下では、数の区別に関わる因子について、英語との比較をまじえながら考察を進めることにする。

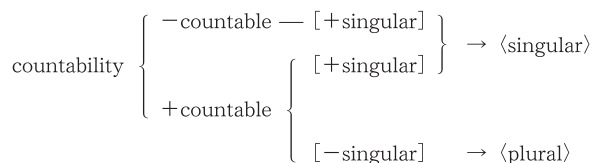
3. 名詞の数と人間の理解のあり方

Tyalar(2002:380)、テイラー・瀬戸(2008:233)は、単複の区別の有無により、英語と日本語を含む諸アジア言語とを、それぞれ「単複区別型言語」(singular-plural languages)と「数詞類別詞型言語」(numeral-classifier languages)の二つのタイプに分類している。しかし、英語における文法的カテゴリーとしての〈数〉の区別は、〈一〉か〈二以上〉かといった一見明快な捉え方をしているように見えるが、果たしてそれでよいのか。また、文法的なカテゴリーのない言語においては、どのような捉え方をしているのだろうか。本節では、単数と複数の区別に関わる〈可算性〉(countability)を手掛かりに、それについて触れつつ、数の区別に関わる人間の理解のあり方を探ってゆくことにする。また、名詞を〈数〉の観点から捉え、その性質について述べる。

3. 1 可算性 (countability)

英語における数の区別は、「単数 (singular)」と「複数 (plural)」という形をとって現れる二項的体系である¹⁶。大雑把に言えば、単数とは、「唯一の存在ないし類似した属性を有する事物の中から一つのみを選択し指す」概念であり、複数とは、「共通の属性や性格を有する事物がただ一つだけではないことを指す」概念である。つまり、〈数〉は外界の事物の在り方に関わる概念であると言えよう。

このような、単数と複数を区別するか、しないかは、可算性の関わりが不可欠であろう。即ち、数えられない〈-countable〉(対象の輪郭が不明確な〈unbounded〉連続体)の場合は、[+singular] の形で現れるが、数えられる〈+countable〉(対象の輪郭が明確な〈bounded〉個体)の場合は、[+singular]・[-singular] の両方の形で現れ得るため、数の概念は可算化できるか否かという可算性の有無が重要な決め手となるだろう。



〔図. 2〕 countability

既に触れたように、〈+countable〉と〈-countable〉の区別は、基本的にある対象を〈個体〉として捉えるか、〈連続体〉として捉えるかということとも関わってくる。しかし、この二極はあくまでも典型であり¹⁷、「数」の文法的カテゴリーがある英語においてたとえ同じ名詞であっても状況によっては〈領域転化〉(〈-countable〉→〈+countable〉、〈+countable〉→〈-countable〉)が生ずる場合もしばしば見受けられ、一義的に決まってくるものではない。例えば、Taylor (2002:377) は(下線は引用者)、

Consider words like *beer*, *coffee*, and *water*. It seem reasonable to say that these nouns are 'basically' mass, in that they designate a kind of substance, but that they can also be used as count under special circumstances and with special meanings. A beer can mean either a standard portion of the substance (order a beer) or variety of the substance (an imported beer). On these interpretations, *beer* can easily appear in the plural (*two beers*, *imported beers*).

と述べており、すなわち、〈量的な限定〉化や〈種類の差異〉化を加えるという操作により境界線が顕在化されるため、〈-countable〉から〈+countable〉へ転化させられるわけである¹⁸。逆に、(5)のように、〈+countable〉から〈-countable〉への転化が生ずる場合もある(斜体・下線は引用者)。

(8)

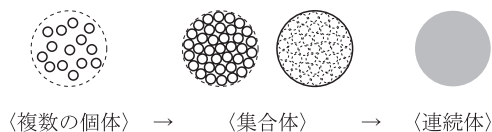
- (5) a. After the accident, there was cat over the road.
b. There's smell of cat in this room.
c. More car for your dollar!
d. I don't eat chicken. (Taylor, 2002 : 378)

これらの場合、通常は〈+countable〉である cat, car, chicken がいずれも〈-countable〉扱いとなっている。それらに共通なのは、個性性を失い、形なく、輪郭なき状態にあるという点である¹⁹。

しかし、このように考えてみると、数の区別は、一見言語によって指される対象が個別性・限定性・境界性のある〈個体〉(individual)か、それがない〈連続体〉かという、指示対象の〈客観的〉な事実により決まる区別のように思われるが、その背後には、実は人間の知覚ないし認知的な営みが深く関わっているであろう。例えば、Lakoff (1987: 428) は、

The relationship between multiplex entities and masses is a natural visual relationship. Imagine a large herd of cows up close — close enough to pick out the individual cows. Now imagine yourself moving back until you can no longer pick out the individual cows. What you perceive is a mass. There is a point at which you cease making out the individuals and start perceiving a mass. It is this perceptual experience upon which the relationship between multiplex entities and masses rests.

と述べ、〈複数の個体〉を〈連続体〉に変換してしまうという認知的な操作について指摘している。しかし、〈複数の個体〉が直接〈連続体〉化するのではなく、



〈図. 3〉連続体化への推移

のように、まず、輪郭をもつ〈均質〉(homogeneous)な要素の〈複数の個体〉の隙間を埋め、〈集合体〉を形成する。次に、構成要素の個性性は捨棄され、連続体と捉え直されるという認知的なプロセスは十分に読み取れよう(この場合は、均質な要素による転化であるため、個体の〈内包〉(intension)は保持しつつ、〈外延〉(extension)だけが変化させられるということが生起している)。上記の指摘は、数の区別について、指示対象の客観的な事実の投影ではなく、人間の知覚ないし認知的なレベルでの解釈の可能性を探る上で興味深い事実を提供していると思われる。さらに、池上(1993: 110-111)は、話し手の〈主体的〉な営みについて(下線は引用者)、

話し手は、たとえまぎれもなく〈個体〉性の明確な指示対象であっても、それを非個体的な〈連続体〉であるかのように捉えたり、逆に、まぎれもない〈連続体〉であっても、それを〈個体〉化して捉えるという、知覚ないし認知的な営みをする能力を有している

と指摘し、指示対象の数的異なりの区別は客観的に定まっているのではなく、話し手の「指示対象をどのように捉えるか」という認知的な営みが深く関わっていると述べている(池上(1993))。以上の指摘は、おそらく「数の区別は随意的 (optional) である」と言われている3言語についても適用可能であるということは容易に見て取れよう。また、このように考えてみると、名詞に関して単数・複数の区別をしない言語もかなり違ったふうに見えてくるのではなかろうか。

3.2 〈通数〉とは

本節では、話を3言語に戻し、名詞の捉え方について具体的な〈言語場〉²⁰と関連付けて考察を進めることにする。

〈名詞〉²¹は、どのようなものであろうか。池上(1993, 2000)には、「典型的な名詞ならば、一方では具体的で個性のある〈モノ〉という知覚の対象となり易いものを指し」(1993: 106)、また、「名詞はすべてそれ自体では何らかのものの概念を表示するだけである」(2000: 137)という記述が見られ、これを手掛かりに若干の考察を行う。

先ほどの「具体的」と「個性」とは、名詞を捉えるための一つの手掛かりになるが、名詞が具体的な場面とは関連を持たない場合、例えば、

(6) J 学生は勉強するものだ。

K 학생은 공부해야만 한다.

haksayng-un kongpwu-hayyaman han-ta
student-TOP study-must-DEC

C 学生应该学习。

xuéshēng yīnggāi xuéxí
student must study

の「学生」は、〈具体的〉な〈個体〉という解釈は大変希薄である。従って、単数・複数の区別を問わない抽象的な概念としての〈表示〉にとどまり、指示の働きが希薄なレベルのものである、ということは十分見て取れる。即ち、このようなレベルで用いられる名詞は、ある出来事の特定の対象を指示するのではなく、一般の真理や慣習的に結びついて喚起される〈一般概念〉(general concept)を表すと考えてよいだろう。これと関連し、伝統文法のJespersen(1924)は、単数・複数の区別をしない、いわば〈通数〉(common number)²²という〈概念的な観点〉の用語を取り上げている²³(太字の強調は引用者)。

(10)

The want of a **common number** form (i.e. a form that disregards the distinction between singular and plural) is sometimes felt, [...]

(Jespersen, 1924: 198)

先ほどの池上の「名詞はすべてそれ自体では何らかのものの概念を表示するだけである」(p. 137) という指摘、そして(6)のような一般の真理ないし習慣を表す文を併せて考えてみると、「名詞はそれ自体では何らかのものの概念を表わすだけであるが、それが具体的な場面との関連を持たない場合、その性質は受け継がれる」と言えよう。また、これを踏まえて3言語の名詞を〈数〉の観点から捉え直してみると、名詞は意味的・形態的に無標である、言わば裸のままの姿である〈通数〉のレベルがもっとも基本的な在り方であり、それが具体的な場面で用いられ、特定の個体を指示する言語的手段(他の形態的な要素)の付与により〈単位〉(unit)化される段階では、必要に応じて単数と複数といった数的異なりの表示が与えられ、指示の意味が現れると解せるであろう²⁴。

3.3 無標と有標の対立

言葉はしばしば「意味が曖昧」と言われる場合があり、それは大きく二つに分けられる。一つは、「一つの表現に関して二つ以上の意味で解釈することが可能な場合」であり、もう一つは、「語の意味そのものが明確でなく、どのあたりまでその語の適用範囲として許容されるかが必ずしも明らかでない場合」である。池上(1978: 74)は前者を「曖昧さ」(ambiguity)、後者を「不確かさ」(vagueness)と呼んでいる。これを踏まえて、以下では、名詞が具体的な場面において用いられる場合、言語的手段の付与の有無による指示対象の数的異なりには、どのような相違が見られるかについて用例を取り挙げ、若干の考察を行う。まず、名詞が無標の場合は、例えば、

(7) J 学生が来た。

K 학생이 왔다.

haksayng-i wa-ss-ta

student-NOM come-PAS-DEC

C 学生来了。

xuéshēng lái le

student come-PERF

(7)の「学生」は、何らかの指示性が現れているが、数的異なりの観点からみると、捉え方によっては二つの解釈が可能になる〈あいまい性〉(ambiguity)を生じさせる。それは、〈動作主〉の存在が〈一〉か、〈二以上〉かであり、話し手は一つの意味を選択し、他の意味を否定する操作が必要となる。即ち、語ないし発話が二つ以上の解釈の蓋然性を含んでいる場合、なんらかの操作によって一つに調整する〈あいまい性除去〉(disambiguation)が行われる。それには語彙的手段と文法的手段とがあるが、3言語

は共に前者の立場を採る(1.1節の〈図.1〉参照)。何らかの形態的な要素の付与には、

(8) a. J 学生たちが来た。

K 학생들이 왔다.

haksayng-*tul*-i wa-ss-ta

student-PL-NOM come-PAS-DEC

C 学生们来了。

xuéshēngmen láiile

student-PL come-PERF

b. J 三人の学生が来た。

K 세명의 학생이 왔다.

sey-myeng-uy haksayng-i wa-ss-ta

three-CLA-GEN student-NOM come-PAS-DEC

C 三个学生来了。

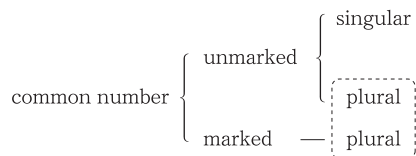
sānge xuéshēng láiile

three-CLA student come-PERF

のように、〈複数形接尾辞〉の付与や〈数量詞〉²⁵の添加といった二つのタイプが考えられるが、前者について若干の考察を加えておく。

少し前に触れたことではあるが、3言語の名詞は他の形態的な要素の付与により〈有標〉化されると、必ず何らかの指示の意味が現れる。即ち、(8a)の「学生」は〈複数形接尾辞〉を付与することによって個別性・境界性・限定性を有する非連続体としての単位が獲得され、具体的な指示の意味が現れている。これは裏を返せば、対象に対して特別な関心を寄せており、それらに焦点を当てて言語化すると解せるであろう。しかし、これはその表現が表す「学生」の数には程度の幅がぼやけており、「不確かさ」の問題を含んでいる。

以上、名詞の無標と有標に見られる数の相違について若干の考察を行った。それを簡単にまとめると、



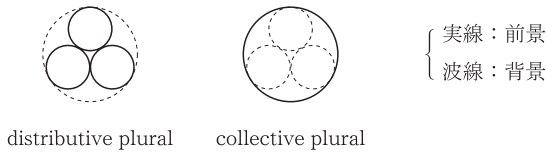
〈図. 4〉無標と有標の対立

のようになる。ならば、無標と有標に見られる「plural」の解釈は、どのように考えればよいのであろうか。

(12)

3. 4 二つの plural の差異

先程取り上げた無標と有標に見られる「plural」は、一見同様な扱いを受けるように見えるが、実はそれは指示対象についての話し手の異なる解釈を提示している。それは、



〈図. 5〉二つの複数の差異

のように、表現の対象となるものの複数性を個別に捉えるか（〈配分複数〉（distributive plural））²⁶、あるいは集合物として全体的に捉えるか（〈集合複数〉（collective plural））といった〈配分性〉（distributivity）と〈集合性〉（collectivity）のことであり、即ち、問題となる対象が話し手によってどのように捉えられるかに依るものである（再掲の場合、形態素単位は省く）。

(9) a. J 学生たちが来た。 (8a) 再掲

K 학생들이 왔다.
haksayng-tul-i wa-ss-ta

C 学生们来了。
xuéshēngmen lái le

b. J 学生が来た。 ((7) 再掲)

K 학생이 왔다.
haksayng-i wa-ss-ta

C 学生来了。
xuéshēng lái le

上記の用例を3.1節で触れた「認知的プロセス」と照らし合わせて考えてみると、基本的には同じものであろう。〈個体〉を意識させるような集合であれば、何らかの〈有標〉的な形で言語化し、それを意識させないような集合であれば、（個体は捨象され）全体として捉えられ、〈無標〉の形で言語化するという理解が得られるであろう。以上のような考察を通して十分に理解できる通り、単複の区別は、文法的なカテゴリーとしての〈数〉の有無を問わず、指示対象を「どのように捉えるか」という話者側の主体的判断が深く関わっている、と言えるのではないか。

また、今までの議論を踏まえて考えてみると、2.1節で概観した林（2006）の「日本語は「単数表現志向」であり、韓国語は「複数表現志向」である」という指摘は、無

標は「単数」であり・有標は「複数」であるといった単純な発想に由来する表面的な考察にすぎないということは容易に読み取れよう。

林 (2006) の言うように、日本語と韓国語における複数形接尾辞の数的多寡のみを考慮し、例えば〈配分複数志向〉か〈集合複数志向〉かを問う、という問題提起の方がより分析的な考察につながるといえよう。この点については、積極的に考慮に入れて分析し直す余地があるように思われるが、与えられた紙幅の問題もあるため、ここでは問題の指摘に留めておくことにし、機会を改めて、検討してゆくことにしたい。

4. むすび

本稿を閉じるに際し、これまで行った議論を簡単にまとめ、今後の課題として残された問題について触れ、稿を結びたい。

本稿では、共に「数の区別のない」と言われている3言語の名詞の数的異なりの表し分けに主眼を置いて、そこに共通して見られる性質について考察した。具体的には、次の二点について触れた。一つは、名詞の数的異なりの区別に関わる人間の在り方について、単数と複数の違いを区別して言語化することが義務的である英語との比較を通じ、指示対象の単数・複数の区別は客観的に定まっているのではなく、話者がそれを「どのように捉えるか」という話者の主体的な判断が深く関わっていることを確認し、同様のことは3言語にも適用可能であることを述べた。もう一つは、林 (2006) や崔 (1998) の言う、日本語は「単数表現志向」であり、韓国語は「複数表現志向」である、という主張は、名詞の無標は常に「単数」を表し、名詞の有標は常に「複数」を表すという、やや単純すぎる議論に立脚している、ということを指摘した。異言語間の言語分析に際し、分析対象の数的多寡は重要な手掛かりとなり得るが、それは考察対象の本質を掘り下げてからの分析方法であろう。

言語によって、名詞の指し示す指示対象の数に関わる表し分けは異なる。また、その表し分けに主眼をおいて名詞を眺めてみると、名詞の階層性の存在に気付く。そのため、名詞を一括して扱っては捉えられないのである。このように考えてみると、「名詞を捉える」ということは、非常に大きなテーマであり、本稿ではそのほんの一端を垣間見たに過ぎない、ということは否めない。しかし、本稿の考察を通じて、3言語の数概念に関わる表現構造の比較に際し、より精度の高い分析・記述への道筋が得られたと思う。

例えば、3.2節で触れた「配分複数志向」と「集合複数志向」という視点からの検証は、今後取り組むべき重要な課題である。

謝辞

本稿の執筆に際し、ご指導を戴いた学習院大学の鷲尾龍一教授に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

(14)

参考文献

・文献を「和文」「韓文」「中文」「欧文」「辞書類」に分けて掲げる。

[和文文献]

池上嘉彦 (1978) 『意味の世界 現代言語学から視る』日本放送出版協会。

池上嘉彦 (1993) 「日本語と日本語論—その虚像と実像⑧」『月刊 言語』Vol.22-No.4. 大修館書店、pp. 106-111.

池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』筑摩書房。

石綿敏雄・高田誠 (1990) 『対照言語学』おうふう。

林 八龍 (2006) 「日・韓両語の数表現の対照研究」『日本研究』第30号。韓国外国語大学校 日本研究所、pp. 315-341.

楳垣 実 (1975) 『日英比較表現論』大修館書店。

大江三郎 (1972) 「数と数の一致」『英語青年』第117巻 Vol.CXV II-No.12. 研究社、pp. 21-23.

大河内康憲 (1997) 「中国語の人称名詞と“们”」『中国語の諸相』白帝社、pp. 75-85.

金田一春彦 (1988) 『日本語 新版 (下)』岩波新書。

國廣哲彌 (1967) 『ELEC 言語叢書 構造的意味論』三省堂。

國廣哲彌 (編著) (1992) 「総説」『日英語比較講座 第4巻 発想と表現』大修館書店、pp. 1-31.

香坂順一 (1967) 「近世・近代漢語の語法と語彙／現代語の語法」牛島徳次・香坂順一・藤堂明保 (編) 『中国文化叢書 1 言語』大修館書店、pp. 296-375.

篠原俊吾 (1993) 「可算／不可算名詞の分類基準」『月刊 言語』Vol.10-No.22. 大修館書店、pp. 44-49.

ジョン・R・テイラー／瀬戸賢一 (2008) 『認知文法のエッセンス』大修館書店。

高橋太郎 (2005) 『日本語の文法』ひつじ書房。

玉村文朗 (1986) 「数詞・助数詞をめぐる」『日本語学』Vol.5-8. 明治書院、pp. 4-14.

崔 朱延 (1998) 「日韓両言語における単・複数表現を中心とした『表現構造』の対照考察」韓国外国語大学校大学院修士論文。

仁田義雄 (1997) 「日本語名詞の数概念の表示について」『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』くろしお出版、pp. 107-122.

藤堂明保・相原 茂 (1996) 『新訂 中国語概論』4版 (初版：1985) 大修館書店。

松本克己 (1993) 『「数」の文法化とその認知的基盤』『月刊 言語』Vol.10-No.22. 大修館書店、pp. 36-43.

松本克己 (2010) 『世界言語の人称代名詞とその系譜 人類言語史5万年の足跡』三省堂。

森重 敏 (1959) 『日本文法通論』 風間書房.

[韓文文献]

・韓文文献の〈 〉は、韓国語の文献名の日本語訳である。

李南淳 (1982) 「單數와 複數」〈単数と複数〉『國語學』11. 國語學會, pp. 117-141.

宋錫重 (1980) 「명사의 복수표기」〈名詞の複数標記〉『한국어 문법의 새 조명』〈韓國語文法の新たな照明〉 지식산업사, pp. 351-368.

蔡琬 (1997) 「단어와 품사」〈單語と品詞〉李翊燮・李相億・蔡琬 (編) 『한국의 언어』〈韓國の言語〉新丘文化社, pp. 105-155. [前田真彦 (訳) 『朝鮮語概説』大修館書店、2004]

崔鉉培 (1937) 『우리말본』〈我が言葉の語法〉延禧専門出版部。[崔鉉培 (1982) 『김고 고친 우리말본 (아홉번째 고침)』〈修正増補版 我が言葉の語法 (第九版)〉正音社、引用は修正増補版による]

[中文文献]

张斌・胡裕树 (1989) 「从“们”字谈到汉语语法的特点」『汉语语法研究』商务印书馆、pp. 131-137.

呂叔湘 (1999) 『現代漢語八百詞 增訂本』商務印書館 [牛島徳次・菱沼透監 (訳) 『中國語文法用例辞典—《現代漢語八百詞增訂本》日本語版』東方書店、2003]

[欧文文献]

Allan, Keith. 1980. “Nouns and Countability”, *Language* 56, 541-567.

Christophersen, Paul and Arthur O. Sandved. 1969. *An Advanced English Grammar*, London.

Corbett, Greville G. 2000. *Number*. Cambridge: Cambridge University Press.

Jespersen, J. O. H. 1924 *The Philosophy of Grammar*. George Allen & Unwin, London.
[半田一郎 (訳) 『文法の原理』岩波書店、1958; 安藤貞雄 (訳) 『文法の原理』(上中下) 岩波書店、2006]

Lakoff, George. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, Chicago and London. [池上嘉彦・河上誓作・他 (訳) 『認知意味論 言語から見た人間の心』紀伊国屋書店、2003]

Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive grammar: a basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.

Rodriguez, P. João. 1604-1608. *Arte da Lingoa de Japam*. Nagasaki. [土井忠生 (訳) 『日本大文典』三省堂出版、1955]

Taylor, John R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford Textbooks in Linguistics. Oxford: Oxford University Press.

[辞書類]

(16)

『標準国語大辞典』国立国語院 WEB版 http://www.korean.go.kr/09_new/index.jsp
亀井 孝・河野六郎・千野栄一 (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂.
中国社会科学院语言研究所 (2005) 『现代汉语词典 第5版』商务印书馆.

用例出典

・用例引用の際、末尾に〈 〉で示した「略号」を用い出典を表記する。

重松清 (2003) 『その日の前に』文藝春秋. 〈その〉

김성기 (2007) 『그날이 오기 전에』이레. 〈kunal〉

注

- 1 仁田 (1997) から拝借したことばである。
- 2 ここでいう“referent”は、「言語外の世界に属する（仮空のものも含めた）事物のこと」である（國廣、1967：237）。
- 3 石綿・高田 (1990：47-48)、楳垣 (1975：84) を参照。
- 4 接辞と畳語形の分類や名詞への付加の規則性・生産性についての判断は、仁田 (1997：112) による。
- 5 本文中の韓国語の表記は、Yale 式ローマ字表記法を用いる。なお、韓国語と中国語の用例には以下のような形態素単位を付す。

略号	形態素単位	略号	形態素単位
ACC	ACCUSATIVE 対格	NUM	NUMERAL 数詞
AUX	AUXILIARY PARTICLE 補助詞	PART	PARTICLE 助詞
CLA	CLASSIFIER 類別詞、量詞	PAS	PAST TENSE 過去時制
COMP	COMPLEMENT 補語	PER	PERSONAL PRONOUN 人称代名詞
CONE	CONNECTIVE ENDING 連結語尾	PERF	PERFECT 完了
DAT	DATIVE 与格	PRES	PRESENT TENSE 現在時制
DEC	DECLARATIVE 平叙文・平叙文語尾	TOP	TOPIC 話題
GEN	GENITIVE 属格	PL	PLURAL 複数
HNR	HONORIFIC 尊敬語	VOICE	ヴォイスの接辞（受動と使役の形態素が同形の場合）
NOM	NOMINATIVE 主格		

- 6 『现代汉语词典』(2005：934) では「后缀。用在代词或指人的名词后面、表示复数」記述されている。
- 7 『標準国語大辞典』による分類である。ここでは紹介にとどめ、詳細な分析は別稿で触れたい。
- 8 韓国語や中国語にも似たような指摘が見られる。例えば、崔 (1982/1937：218) と Ramstedt (1939: 5) は、韓国語の複数表示が「随意的」かつ「強調的」であ

ると述べている。また、藤堂・相原（1985/1996：174）は「中国語は、英語のように単数と複数とをやかましく意識しないので、前の数詞によって複数であることが明白なときは、あとの名詞に“～们”をそえません」と指摘している。さらに、香坂（1967）によると、中国語の人称代名詞の単複は、西欧の言語の影響を受けて近代の中国語で発達したものであり、古代にはなかったものであると述べられている。

- 9 日本語の名詞の数については古くから記述されており、例えば、Rodriguez（1604-1608）の『日本大文典』には次のような一節が見られる（下線は引用者）。

この国語はある点では不完全なものである。何となれば、名詞は格による変化を欠き、単数複数の別及び性の別を持たず、動詞は人称及び単数複数の別を欠き、[…]（土井訳、p.5）
- 10 一人称の複数には、相手との関わりによって二つの用法が考えられる。すなわち、相手を含む「包括的(inclusive)一人称複数」と相手を含まない「除外的(exclusive)一人称複数」とに分けられる。しかし、この区別は一般的でないため、積極的には取り上げられておらず、更なる考察は稿を改めて取り上げていきたい。
- 11 日本語の人称代名詞は、高橋（2005：52）による。
- 12 「*wuli*」の場合、形態的な付加が伴わなくても複数の意味を表すが、形態的な変化が生起しているため、ここでは有標とする。
- 13 3言語の二人称複数と関連し、Jespersen（1924: 190-194）の“normal plural”と“plural of approximation”の分類を取り入れることで新たな知見が得られると思われるが、紙幅の関係で、この点については稿を改めて取り上げていきたい。
- 14 松本（2010：11-12）によると、「日本語を含めて東アジアのほとんどすべての言語は、特に3人称と呼ばれるような代名詞を本来持っていなかった」と指摘しており、「いわゆる3人称は、人間だけでなく発話の中で話題となるあらゆる事象、発話と発話者を取り囲む外的世界の一切をその指示対象の中に取り込んでいるという点で、厳密な意味で人称のカテゴリーを逸脱しているだけでなく、1、2人称とは全く性格を異に」しているため、3人称とは「非人称」ないし「ゼロ人称」にほかならず、「人称代名詞よりもむしろ、直示(deictic)と発話内指示(anaphoric)を含めた広義の指示代名詞の枠内に納めなければならない」と述べている。本稿では、松本（2010）に倣って3人称という用語の代わりに「非人称」という用語を用いることにする。
- 15 林（2006）で使った資料は、「東亜日報、朝鮮日報、中央日報と日本の朝日新聞（いずれも2005年）からであり、韓国の新聞の日本語訳は各新聞社のインターネット日本語版によるもの」である。なお、Yale 式表記法と形態素単位は筆者による。
- 16 3言語も二項的体系に属する。しかし、数の区別は、単数と複数の二つに限られ

(18)

るわけではない。松本（1993：37-38）によると、「単数・双数 (dual)・複数」の三項的な数体系をもつ言語（アラビア語、オセアニア諸言語やアメリカの諸言語）や、「単数・双数・三数 (trial)・複数」の四項的な数体系をもつ言語（ポリネシアのフィジー語）も存在するため、外界の事物を数の観点から二分割するだけが適切な区切りとはいえないと指摘している。

17 二つの典型について、例えば Langacker (2008) は、“Typical for count nouns are the names of physical object (e. g. *diamond, book, cup*), and for mass nouns, the names of physical substances (*gold, meat, water*)” (p. 129) と述べている。

18 具体的な用例を挙げるならば、

① a. Can I have a cup of coffee, please?

b. Can I have two coffees, please?

② a. French wines are better than Japanese *ones*.

(篠原 (1993：46、下線は引用者))

b. How about a good white wine?

のようなものが考えられる。

19 このような〈-countable〉と〈+countable〉と関連し Christophersen (1969) には “Potentially any noun can occur in both functions” (p. 110) という記述も見られる。

20 森重 (1959:1) から借用した用語である。

21 ここでいう〈名詞〉とは、固有名詞ではない一般の名詞を指す。

22 半田 (1958) の訳語である。

23 Jespersen (1924: 197) には、〈通数〉の必要性について、“In this connexion we may also notice that when we say *my spectacles, his trousers, her scissors*, no one can tell whether one pair or more pairs are meant, thus whether the correct translation into other languages would be *meine brille, son pantalon, ihre schere*, or *meine brillen, ses pantalons, ihre scheren*. (But when we say “he deals in spectaclees; the soldiers wore khaki trousers,” etc., the meaning is obviously plural.) The plural forms *spectacles, trousers, scissors*, in themselves thus from a notional point of view denote a ‘common number.’” と記述されている。

24 Allan (1980: 554) は、“All the evidence indicates that nouns are basically uncountable, with many of them being countable to a certain extent. [...] uncountableness is unmarked, and so presumably is the basic form.” と述べており、ここでの “nouns are basically uncountable” という記述は意味的・形態的な観点から見ると、〈通数〉と相通じるところもあろうし、また、名詞が〈+countable〉扱いを受けるためには何らかの形態的な要素を付与し、〈有標〉化さ

れなければならないということを示唆している。

- 25 張・胡 (1989: 135) では「这样, 我们就不难解释为什么“学生们, 三个学生”可以说, 而“三个学生们”不能说。“三个学生们”之所以错误, 不在于违反了经济的原则, 而是“计量”与“不计量”产生了矛盾, 表“数”与表“群”产生了矛盾。按照汉语的习惯, 你可以说计量的复数(三个学生), 也可以说不计量的群体(学生们), 但是在同一句话中, 你不能既计量又不计量, 既表示数又表示群体。所以, 说“三个学生们”是违反汉语语法规则的」と述べている。大雑把にまとめると、「三个学生们」が言えないのは「計量」と「不計量」が衝突するからであると説明している。それに対し、大河内 (1997: 84) は「“三个”を加えることと“们”を加えることは名詞を具体化するための同種の文法的な操作であり、中国語ではその繰り返しは許されない、あるいは強い抵抗がある」と指摘している。同様の指摘は韓国語にも見られ、例えば、蔡 (1997: 120) は「特に *twu salam* (二人) のように特定の複数が具体的に指示される複数の表現には、複数接尾辞 *tul* が添加されない」(前田 (訳)、p. 107) と指摘している。また、楳垣 (1975: 84) は、日本語について「ふたりの女たち」はおかしい表現であると述べ、さらに「柴田武氏によれば、これとほぼ同じ言語現象は、日本語、トルコ語のほか朝鮮語やインドネシア語、それに中国語にもみられるという。それから考えてみると、英語のような単数・複数という数の考え方使い方は、おそらくインド・ヨーロッパ語族に限られたもので、アジアの諸言語の数の考え方使い方は、それとは性質の違うものらしい」という一節も見られる。このように考えると、3言語は「数詞＋名詞＋複数形接尾辞」のような連鎖は許されないということである。しかし、韓国語に関しては、

・二人のためというよりむしろ和美に、よかったな、と言ってやりたい。

(その、p. 261)

・두 아이들보다는 오히려 아내에게 좋겠네、라고 말해주고 싶었다.

(kunal, p. 315)

*twu aitu*potanun ohilye anayeykey cohkeyssney, lako malhaycwuko sipessta のような(「数詞＋名詞＋複数形接尾辞」)用例も見られるため、より仔細な分析が必要であろう。これについて、ここでは問題の指摘に留めておくことにし、今後の課題としたい。

- 26 この場合〈個別〉(individual) → 〈分散〉(distributive) (ないし「分散→個別」)のプロセスを経て名詞の「複数化」(pluralization)が生ずるのであろう。